



## アピモンディア 2005 第 39 回国際養蜂会議



APIMONDIA

### 開催国アイルランド

“Céad Míle Fáilte / 10 万回のようにこそいらっしやい” とのアイルランドの古いあいさつとともに、養蜂家、養蜂企業家、多くの友人を 2005 年 8 月にダブリンで開催される第 39 回国際養蜂会議にお招きしたい。「庭先にミツバチを飼って 5 千年」をテーマに、わが国で初めて開かれるアピモンディアである。アイルランドと私たちの養蜂を皆様にご覧いただきたい。

7 千年前の人類の居住跡が認められているアイルランドは、北大西洋の東端に位置する長い歴史を持つ島国である。アイルランド島は総面積約 84,500 km<sup>2</sup>（北海道とほぼ同じ）、南からマンスター、レンスター、コノハト、アルスターの 4 地方、32 県に別れ、その内の 26 県がアイルランド共和国を構成し、残りの 6 県は北アイルランドとして英国に属する（図 1）。

共和国の人口約 400 万人のうち約 150 万人が首都ダブリンに住む。アイルランド島は何世紀もの間、くり返し外部からの来襲や侵略を受け、多様な祖先、文化、伝統の入り交じる現在の国ができた。主な宗教はカトリックとプロテスタント、政治形態は複数政党による議会制民主主義である。GDP (2002) は約 25,000 ユーロ、アイルランド共和国の通貨は 2002 年 1 月からユーロ (EUR) に切り替えられた。

ゲール語（アイルランド語）が第 1 公用言語だが、日常的に使われるのは英語である。ゲール語は全国の学校で教えられているが、主に北西海岸のゴールウェイ、ドネゴールおよびメイヨーの西部地域でのみ日常的に話されている。

氷河期が終わり、その後の氷蝕と堆積によって形成された景観が現在も残る。氷河は西から

東へ移動したので、特に島の西部と北西部では地表の土壌が取り除かれて、花崗岩の岩盤が露出する不毛な地帯が形成された。大西洋からの厳しい波風の影響を受けた断崖絶壁や、一面岩が剥き出しの台地バレンなどが代表的な自然景観である。東部には氷河が運んだ堆積粘土や砂で肥沃な土壌が形成され、ダブリン近郊ミーズやコーク近郊のティペラリー一帯ではうねった小丘陵が続く緑豊かな田園風景が広がる。一方南西部は暖流の恩恵を受け、輝く海岸に南方系植物も育つ。他に特徴的なのは国土の 2 割に見られる泥炭地「ピート・ボグ」である。「ピート・ボグ」は苔や植物が湿った地中で腐敗し、数千年にわたって堆積し圧縮された結果できた泥状の地層で、これらの泥炭層を切り取り乾燥したものは「ターフ」と呼ばれ、現在でも各家庭の暖房用燃料として使用されている。

各地の自然景観は、気紛れな空の変化とあいまって様々な表情を見せる。アイルランドの天気は予想もつかない。メキシコ湾流（暖流）の



図 1 アイルランド島はアイルランド共和国と北アイルランド（英国）からなる

影響で、緯度の高い割には温暖に一年は推移する。年間降雨量 1500 mm, 雨か曇りの日が多く、一年を通じて降雨があるが、特に最も高温（平均気温 17℃）になる 8 月は降水量が多い。ところが夏の数か月間には突然熱波が襲うこともあり、見通しを立てるのが難しい。

近年の人口変化には目を見張るものがある。主食ジャガイモの疫病が引き起こした大飢饉による死亡と国外流出で 1845 年からの 5 年間に全人口の 20% が減少した。その後も 1980 年代まで 100 年以上続いた減少傾向は、1990 年代から始まった空前の好景気経済によって止まった。海外移住者の U ターン帰国と世界各地からの新たな流入で人口は上昇に転じた。失業率が 20% を超え、毎年 5 万人を超える若年労働者が海外へ職を求めた 1980 年代の状況は、いまや想像できないほどである。アイルランドの年齢構成はヨーロッパ諸国のなかでも特に若く、全人口の半数以上が 30 歳以下の若年層で占められ、街に活気溢れる雰囲気を生んでいる。

この緑の国、聖パトリック（アイルランドの守護聖人）とシャムロック（国花シロツメクサ）の国、アイルランドへ、皆様をお招きしたい。

### アイルランドの養蜂

ミツバチは太古の昔から 21 世紀の今日に至るまで、人々を魅了し続けている。人類はミツバチが不思議な力を持つ素晴らしい生き物であることに気づき、科学の光が当てられ多くの事実が解明されるよりはるか以前から、驚くべきミツバチの物語を信じていた。

原始時代、人類は多くの時間を食糧確保のために費やしていたが、すぐにミツバチから貴重な食料が得られることに気がついた。森にあるミツバチの巣からはハチミツだけでなく、蜂児も奪い取れることを学んだのである。

多くの古代民族がミツバチに対してある種の畏怖の念をいだき、彼らの宗教やキリスト教にはミツバチが登場する。例えば旧約聖書はもとより、イスラム教のコーラン、ユダヤ教のタルムード、ヒンドゥー教のリグヴェーダなどそれぞれの宗教の根幹となる書物にミツバチに関す

る記述が見られるのである。

アイルランドでは長い間ハチミツが唯一の甘味料であった。貴重な甘み以外にも大切なものをミツバチはもたらしてくれた。古代ローマや中世では、高価で入手が難しかったパピルスや羊皮紙の代わりに、板に蜂ろうをぬり、その上に尖筆で文字を書く「ろう引き書板」が広く使われた。最も古い酒、ミード（ハチミツ酒）はたいへんに好まれた。キリスト教との関わりでミツバチが果たした重要な役割は、様々な儀式で用いられる大量のろうそくに必要な蜂ろうを供給したことといえよう。ドイツには、ミツバチはその目的のために地上に送られた、という言い伝えがあるほどである。

### アイルランドの養蜂伝説

アイルランドでは「ミツバチに告げる」習慣が今日まで廃れずにきている。ミツバチは「永遠の命」のシンボルとみなされ、蜂群の所有者が亡くなると、ミツバチがその人を導いて、一緒に天国に行ってしまうと信じられていた。そこで蜂群を失わないために、その棺が家を後にするときには、巣箱を回して巣門の向きを変えておく。またミツバチには葬式振るまいとして、いくらかの餌が与えられた。さらに蜂群の新しい所有者が決まると、ミツバチにそのことが告げられ、彼らがそのまま留まってくれるように改めて頼まれるのだ。この儀式をちゃんと行わないとミツバチは飛び去るか、死んでしまうといわれる。

アイルランドの一部の地域では、赤ん坊の誕生や結婚のこともミツバチに告げられ、お祝いとしてやはりいくらかの餌が振まわれる。現在も家の軒先や煙突に作られたミツバチの自然巣はその家に幸運をもたらす前触れであり、これ破壊すると何か悪いことが起きるといって、人々は躊躇する。

ミツバチの起源について今も伝わる風変わりな説をいくつか紹介しよう。フランス・ブルターニュ地方の伝説では、十字架に付けられたイエス・キリストが流した涙がミツバチになり、この世に甘いものをもたらすために、ゴルゴダ

の丘から飛び去ったという。また別のフランスの伝説は、イエス・キリストがヨルダン川で洗礼を受けたとき、その腕から落ちたしずくがミツバチとなった。すぐに飛び立とうとした蜂に対してイエスは、人々のために働くべく地上に留まるように、父と子と聖霊の御名において命じた、と伝えている。

自然発生説でミツバチは牡牛や仔牛の死体から発生するという。このブーゴニア Bugonia とよばれる考え方はエジプトではじまり、ローマの詩人ヴェルギリウスの『農耕詩』とその後続く人々の著作を通じて、古代社会に広まった。当時は固定巣板で飼われていたので、巣箱内のミツバチの様子を実際に見ることは困難で、人々の知識は大変限られていたのである。

不思議なことにギリシャ・ローマ時代の様々な著者による膨大な書物の中には、初期の養蜂で使われた巣箱についての記述がほとんど見られない。恐らくヤナギ細工のかごのようなものが多く使われたのだろう。その後、8世紀のシャルルマーニュの時代にドイツでわらを使うスケップが流行し始めた。その後ゲルマンの大移動により、エルベ川沿いの谷からきたドイツ系民族がスケップをブリテン島に、ついでアイルランドにもたらしたと考えられている。

### 養蜂の守護聖人

養蜂は古代エジプトで発展し、ついでギリシャさらにローマ帝国にまで広まった。ミツバチがいつこのアイルランド島にやってきたのか、正確なことは誰にもわからない。様々な説のなかに私たちが伝説としてよく知っている、次のような物語がある。

ウェールズの守護聖人、聖デイビッドは6世紀にウェールズとアイルランドへの布教を進め、多くの修道院などを建設した。アイルランド出身の聖モドンノック (St. Modomnoc) は、ウェールズの教育中心地となったペンブロークシャーにある聖デイビッドの修道院で学び、共に布教を行った (見習い僧の頃にミツバチを飼い始めたといわれる)。やがて聖モドンノックが老齢のため船で故郷に戻るとき、飼っていた

ミツバチの一群が、アイルランドに向かう彼を追って、マストにとまった。ウェクスフォードに新たに居を構え隠遁生活に入った聖モドンノックのもとから、エリン地方 (アイルランドの古い呼称) 全体にミツバチが分布するようになった、というものである。

この物語には実はウェールズ版もあり、それによると聖デイビッドはミツバチを祝福し、それを聖モドンノックに与えたという。養蜂家の守護聖人のひとりになっている聖モドンノックはアピモンディア 2005 のシンボルマークにその姿を見せている (図2)。

また、6世紀の聖人、聖モロッグもアイルランドに初めてミツバチをもたらした人として褒め称えられている。彼はバルブリッカン (養蜂家の僧院) と呼ばれた修道院を建設した。

### ミツバチと養蜂の伝来

伝説がどのような起源を伝えようとも、地理的な条件を考慮すれば、ミツバチはもっと昔からアイルランドに生息していたものと思われる。最後の氷河期が約8000年前に終わり、天候が暖かくなると、地上を覆い尽くした氷が溶け、植物が新しい気候の中で次第に繁栄していった。当時アイルランド島とブリテン島は大陸と陸続きだったが、氷河が溶け海面が上昇す



図2 左) アイルランドの養蜂守護聖人、聖モドンノックはアピモンディア 2005 のロゴにも、虹のかかるスケップの隣に立ち、ハチミツの容器 (?) を持って登場している。

ると、まずアイルランド島がブリテン島から別れ、次にブリテン島がフランスから分離した。ミツバチはこの隔離が起きるより前に、東から西に向かって分布域を拡げ、アイルランド島まで到達していたと思われる。その頃人類も西に向けて移動しており、ケルト神話にその名を残すフォーモール族、フィボルグ族、ネメディアン族、それに我々の祖先であるケルト族も含まれた。おそらく彼らのごく簡単な養蜂をこの島に持ち込んだのだろう。

中世の 1000 年間には特にめざましい養蜂技術の進歩は見られなかったが、限られた資料の中では、7 世紀の学者、「イギリスの学問の父」とも讃えられる尊者ビーダがその著作で、「アイルランドが乳とハチミツの流れる豊かな島である」としている。アイルランドの古文書にはミツバチ、ハチミツ、蜂ろう、それにハチミツ酒についての言及が多く見いだせる。

中世から 17 世紀までのアイルランドの人の諸権利・慣習をまとめたプレホン法の第 4 書には Bech Bretha (Bee Judgements) と名付けられた、ミツバチに関わる法をまとめた部分がある。これも、アイルランドにおけるミツバチと人との関わりの深さを示している。

### 技術の進歩とロイヤルダブリンソサイエティー

養蜂技術はあまり進歩しないまま長い年月を過ごし、昔から言い伝えられた多くの神話や迷信がそのまま残されていた。ミツバチを飼う農民の多くは文盲で、無学だった。学問があり養蜂技術を身につけたのは、僧院の修道士達であった。しかし 16 世紀、ローマ法王と対立した英国王ヘンリー八世が多くのカトリック修道院を破壊・解散させたために、それまでに蓄えられた専門技術は人、文書ともに散逸、ある意味では僧院から世間に広まるきっかけとなった。

ルネッサンス期には教会の束縛から解放された自然科学が華々しく発展をとげ、1760 年以降ミツバチに関する私たちの知識も大幅に増した。そのなかでロイヤルダブリンソサイエティー (Royal Dublin Society: RDS, 図 3) の貢献も大きかった。RDS は 1731 年に研究機関とし



図 3 高級オフィス街に建つ RDS. 現在も国際展示場として多彩な催しが行われている

て設立され、ダブリンの近代都市開発を推進し、国立博物館、図書館、植物園の建築を後援、アイルランドの工業、芸術、科学、農業の発展を支援してきた。欧州で最初に作られた品評会場、RDS ショーグラウンドでは、作物や家畜の品種改良研究などを行なった。1733 年にはミツバチの飼養法に関する論文の発表を開始し、それ以後多くの研究が行われてアイルランドのミツバチに対する理解は大いに進んだ。その研究機能は 19 世紀末に国に引き継がれたが、ショーグラウンドの建物や広い庭園は、アイルランド最大の国際会議・展示場として利用されている。その由緒ある施設で今回のアピモンディアが開催される。

ミツバチ管理技術は向上し、ミツバチ科学の発見は大幅に進んだ。養蜂家の仕事も大きく変化している。小さなミツバチたちは洪水、火災、飢餓、あらゆる天候と気象、様々な病気や害敵、さらに人の手にも負けず、けなげに生き延びている。そして今もなお、太古の昔と同じように人々を魅了する不思議な生き物なのである。

### アイルランドの養蜂現状

アピモンディア 2005 の開催国主催団体であるアイルランド養蜂家連盟 (Federation of Irish Beekeepers' Associations: FIBKA, 図 4 左) は国内各県の養蜂協会が加盟する全国組織である。

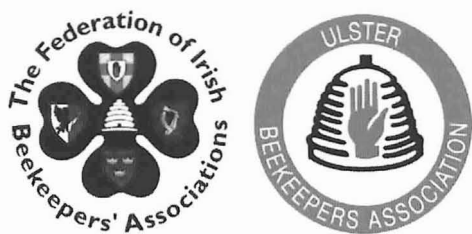


図4 アイルランド養蜂家連盟（左）と北アイルランドのアルスター養蜂家協会（右）のロゴマーク

月刊雑誌“An Beachaire - The Irish Beekeeper”を発行し、毎夏ゴーマンストン大学を会場に養蜂研修を実施、合わせて全国ハチミツ品評会も開催する。養蜂普及のために入門レベルから中級、上級、講師級、それとハチミツ審査員の5種の技能試験を実施している。FIBKAは大規模な農業祭である全国耕起競技会(National Ploughing Championships)や、世界的に有名なRDSのダブリンホースショーをはじめ、各地の農業関連の催しで養蜂についての教育的展示を行っている。また養蜂家を対象とした保険事業も行う。これら養蜂に関する全ての活動を国の農業省や農業食糧開発当局と調整の上で進めている。北アイルランド(英国)のアルスター養蜂家協会(Ulster Beekeepers' Association: UBKA, 図4右)はFIBKAと共に、約60年前に設立され、それ以来親密に連携して活動してきた。

FIBKA登録養蜂家は約2,500名で、未加盟養蜂家がさらに700名程いると思われる。会員の多く(72%)は趣味養蜂家で、飼養蜂群数は1~10群である。11~20群の養蜂家が

13%, 21~50群は11%, 51~200群の中規模養蜂家が4%, 200群以上の大規模養蜂家は0.4%である。ハチミツの平均年間生産高は250t, これは国内需要を充足するにはまったくの不足で、2002年には1968tが輸入された。

### 養蜂家層の広がり

FIBKAに加盟する46県の養蜂協会は地域の養蜂家を指導援助している。冬季には室内で講演会、蜂が活動する時期になれば協会の蜂場で一連の実習訓練を行う。多くの協会が初心者向け養蜂教室を開いて、一般の人や趣味の養蜂を始めようかと検討している人に、会員が無料で相談に乗っている。毎年ハチミツ品評会を行う協会も多く、会員は自慢の自家製ハチミツやろうそくなどを持ち寄っている。

典型的なアイルランドの養蜂家像は中年の男女である。若いうちに養蜂を始める人は少ないが、一戸建てのわが家を手に入れると、庭でミツバチを飼い始めようと思う人が多い。常勤の仕事を引退して趣味養蜂に転進する人が増えており、引退時期が早まりつつある昨今は、養蜂家の平均年齢は若年化傾向にある。近年は女性養蜂家が着実に増加していて、養蜂協会の実務や教育活動に積極的に加わっている。

### 巣箱とハチミツ

アイルランドで多く見られるのは暗色のセイヨウミツバチ *Apis mellifera mellifera* (メリフェラ種)である。大陸と英国ではこの亜種は使われなくなったり、他のヨーロッパ亜種との交



図5 左から、わらを編んだスケップ、伝統的なC.D.B.巣箱、在多いNational巣箱



配系統に変わられているが、現在アイルランドに分布する系統は、例外的に純粋な形質を残していることが形態学と遺伝子の分析研究から判明している。

伝統的なわら製スケット（図5左）に代わり、アイルランドで使われるようになった木製巣箱は、C.D.B. Hive（CDBはCongested Districts Board＝過密地域委員会の略で、「囲い込み」によって農民が集中した人口密集地で土地のない貧農に多分野の農漁業指導などを行っていた）と呼ばれ（図5中）、木枠入りの巣蜜を作るのに最適との評判を得た。しかし遠心分離採蜜法が広まるにつれ、National型（図5右）とModified Commercial型巣箱が一般化して今日に至っている。

冷涼湿潤な海洋性気候のため養蜂時期は短い。主要流蜜期はクローバーとブラックベリーが開花する6月半ば～7月末まで。5月末～6月始めにも流蜜があり、この頃の蜜源植物はシカモアメープル、マロニエ、セイヨウサンザシ等の樹木である。野生植物はアイルランドのハチミツに香りを増している。地域によりシナノキ、フクシャ、エリカなどから独特の香りを持つハチミツがつくられ、品評会でひとときわ注目を集めている。ロンドンのThe British National Honey Showでも、アイルランド産ハチミツは毎年多くの賞やトロフィーを獲得している。

### 育種事業

約20年前にミツバチ改良育種家協会に数名の実行委員会が作られ、絶滅に瀕していたアイルランド在来種の暗色ヨーロッパ亜種系統の保護と改良研究に着手した。Galtee Bee Breeding Groupとして知られるこのグループには現在ではマンスター、レンスター、アルスター各地方の養蜂協会から60名以上が活動に参加している。形質の評価と優良系の選抜により、暗色のアイルランド種は次第に改良され、現在までの結果はたいへん有望である。

### 北アイルランドの養蜂

北アイルランド（英国）では約700名の趣



図6 ヒースハチミツの蜜源ギョリュウモドキ

味養蜂家が約4000群を飼養し、その約半数がアルスター養蜂家協会加盟の9つの地区協会に所属する。養蜂家の社会的背景は多様で、様々な階級、宗教、政治、性別の人が養蜂を楽しんでいる。最近Leader 2基金の援助により全地区で協会所有蜂場を整備することができた。

北アイルランドの農作物には養蜂植物となるものがない。牧場は農薬が大量に散布され、放牧される家畜数も多い。そのためクローバーなどの蜜源はあまり期待できない。しかし2か所の貴重な蜜源地域が残っている。エリカ（Bell Heather: *Erica cinerea*）のあるモーン山地とギョリュウモドキ（Ling: *Calluna vulgaris*, 図6）の本物のヒースハチミツが生産されるスペリン産地である。

アルスターでは移動養蜂を行う人が多い。5月にはアルマー県に広がる1800 haのリンゴ農園に蜂群を置き、夏の終わりにになるとヒースに移動する。

この地域の養蜂で最も魅力ある特徴は、教育熱心という点であろう。農業村落開発省は農業食糧開発当局の農業大学校を通じて、毎年2段階の養蜂講習を実施している。このため養蜂技能試験を受ける人の割合がアイルランド島のどの地区と比べても高くなっている。

編集部注：本稿はアピモンディア2005公式サイト <http://www.apimondia2005.com> に掲載された情報とセカンドサーキュラーにあるPhilip McCabe, Tadhg O'Mahony, Michael MacGiollacoda, Norman Walsh各氏の原稿を中心に編集した。（翻訳 榎本ひとみ）

# アピモンディア 2005 第 39 回国際養蜂会議

## 開催概要（セカンドサーキュラー抄訳）

アイルランド共和国の Mary McAleese 大統領を大会後援者に迎え、由緒あるロイヤルダブリンソサイエティーで開かれる本大会は、そのテーマ「庭先にミツバチを飼って 5000 年」が示すように、趣味の養蜂家が主であるアイルランド養蜂の特徴を反映している。学術セッション、アピエキスポ 2005 と並行して、養蜂に関する教育的展示、各国の養蜂、非営利団体の活動や伝統養蜂技術などを紹介する国際アピモンディア村が企画され、一般の人にも無料で開放される。自慢のハチミツを世界から持ち寄るワールドハニーショウや、3 夜連続養蜂ワークショップも行われる。

### 大会プログラム

#### 学術セッション（スケジュールは次頁参照）

養蜂学、養蜂技術にまつわる広範な分野の新しい研究発表を募集する。2004 年 11 月に大会ウェブサイト上发表される詳細な内容にしたがい、投稿すること。要旨締め切りは 2005 年 5 月 1 日。アピモンディア常任委員会が審査の上、各論文の発表形式（口頭・ポスター）

を決定し、著者に発表日時を含めて通知する。

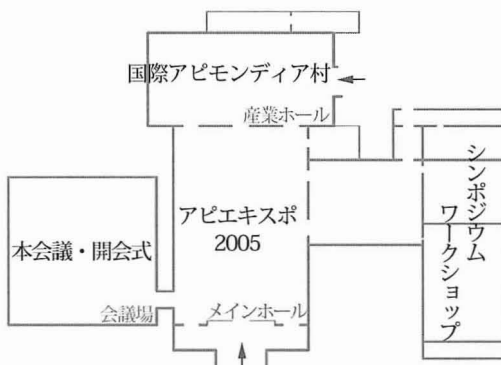
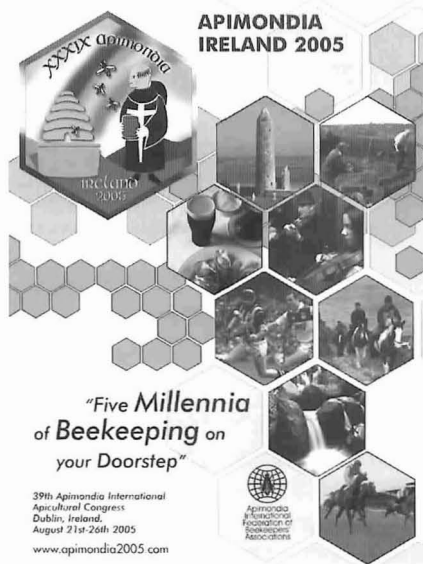
本大会では同時通訳が本会議のみであり、口頭発表はできる限り英語で行うこと、またポスター発表者は口頭発表者が欠席の場合に備えて、代わりに発表できるように準備することを希望する。2005 年 6 月 1 日までに大会登録を完了しない場合は発表取り消しとなる。

### コンテスト

伝統あるアピモンディアコンテストが以下の出品カテゴリーについて行われる。出品資格は大会参加者であること。過去の大会ですでに受賞したものの同カテゴリーへの再出品は不可。参加料他、詳細は大会公式サイトで。

#### コンテスト出品カテゴリー

- ①養蜂関連新技術と改良技術、②新しいミツバチ生産物、③生産物の包装、④養蜂関連フィルム、⑤ビデオ作品（プロ、アマ）、⑥養蜂関連スライド、写真、⑦書籍、⑧CD およびデジタル作品、⑨切手コレクション、⑩養蜂コレクション、⑪養蜂雑誌、⑫ウェブサイト、⑬アピエキスポ展示ブース



アピモンディア 2005 のセカンドサーキュラーの表紙(左)と会場となる RDS の館内見取り図(右)。すべての催しが同一フロアで行なわれる。

## アピエクスポ 2005

8月21～25日の5日間、養蜂に関わる最新の製品と技術の進歩が展示される。会場となるメインホールにはアピモンディア参加登録やその他受付が設けられ、発表会場にも隣接する(図1)。アピエクスポ 2005にはすでに150件以上の出展が見込まれ、これまでで最大規模の展示会として、関係者のネットワーク作りとビジネスに大きなチャンスとなるだろう。

展示用スペースは壁用パネル、ライト2灯、看板、電源ソケットが標準装備され、その他資材は別料金となる。会場は全面カーペット張り込み。

アピエクスポ出展料

出展料	12 m <sup>2</sup>	1 m <sup>2</sup> 追加毎に
標準装備	EUR 3,250,	EUR 245
装備なし	EUR 2,500	EUR 185
備考	2名分の登録料を含む	

※各料金には21%の付加価値税が加算される

出展者特典：出展料には広さに応じてスタッフの登録料が含まれる。大会登録者10名以上を伴う出展や、国別展示会場出展者にはさらに特典が用意されている。アピエクスポに関して詳細な情報がウェブサイトで見られる。出展申込みを下記事務局で受付中。

アピエクスポ関連の申込み・問い合わせは下記まで。

David Shirley  
Exhibition and Sponsorship Manager  
Ovation Group  
1 Clarinda Park North  
Dun Laoghaire, Co.Dublin, Ireland  
Email: dshirley@ovation.ie  
Website: www.apimondia2005.com

## 国際アピモンディア村

アピエクスポ 2005 会場に隣接する産業ホールに、商業的出展者でない人々のための特別区域が設けられる。アイルランド各県の養蜂協会

大会プログラム

午前 09:00 - 13:00		昼 13:00 - 14:00		午後 14:00 - 18:00		夜 18:00 -	
8月 21日 (日)	大会登録11:00 - 18:00 アビエクスポ・国際アビモンディア村 13:00 - 18:00					開会式 レセプション	
22日 (月)	大会登録・アビエクスポ 2005・国際アビモンディア村 08:30 - 18:00					アビモンディア 総会 (その1)	
	村落開発養蜂委員会本会議	ポスター 発表	蜂病委員会本会議		養蜂実技ワ ークショッ プ		
	アピセラピーシンポジウム (その1)		アピセラピーシンポジウム (その2)				
	花粉媒介・養蜂植物ワークショップ (午前)		花粉媒介・養蜂植物ワークショップ (午後)				
			養蜂技術・蜂具シンポジウム (その1)				
23日 (火)	大会登録・アビエクスポ 2005・国際アビモンディア村 08:30 - 18:00					養蜂実技ワ ークショッ プ	アイリ ッシュ ナイト
	ミツバチ生物学委員会本会議	ポスター 発表	花粉媒介・養蜂植物委員会本会議				
	養蜂経済シンポジウム (その1)		養蜂経済シンポジウム (その2)				
	村落開発養蜂ワークショップ		村落開発養蜂ワークショップ				
	アピセラピーシンポジウム (その3)		養蜂技術・蜂具シンポジウム (その2)				
	蜂病シンポジウム (その1)						
24日 (水)	大会登録・アビエクスポ 2005・国際アビモンディア村 08:30 - 18:00					養蜂実技ワ ークショッ プ	
	養蜂技術・蜂具委員会本会議	ポスター 発表	養蜂経済委員会本会議				
	花粉媒介・養蜂植物シンポジウム (その1)		花粉媒介・養蜂植物シンポジウム (その2)				
	村落開発養蜂ワークショップ		村落開発養蜂ワークショップ				
	蜂病シンポジウム (その2)		ミツバチ生物学シンポジウム (その1)				
25日 (木)	大会登録・アビエクスポ 2005・国際アビモンディア村 08:30 - 18:00					総会 (その2) 閉会式	
	アピセラピー委員会本会議	ポスター 発表	蜂病委員会本会議				
	花粉媒介・養蜂植物シンポジウム (その3)		養蜂技術・蜂具シンポジウム (その3)				
	村落開発養蜂ワークショップ		村落開発養蜂ワークショップ				
	蜂病シンポジウム (その3)		ミツバチ生物学シンポジウム (その2)				
26日 (金)	見学旅行 (全10コース, p. 140-141 参照)						



と連盟は長年、組織立った養蜂教育、養蜂技能試験やミツバチ生産物の品評会を実施して養蜂技術の切磋琢磨を続けている。一般への啓蒙活動も盛んである。それらの活動を世界レベルに拡大して、今回国際アピモンディア村を開設することになった。

養蜂についての教育的展示、アピモンディア参加国代表による自国紹介、非営利団体や伝統養蜂技術の展示が行われる。また同会場ではハチミツ品評会ワールドハニーショウも催される。一般に無料で公開されるこの会場は出展料が割安。こちらへの出展も受付中。

### ワールドハニーショウ

世界中のアピモンディア参加者、出展者による初めてのハチミツ品評会である。アイルランドでは養蜂の重要な要素として長く行われており、1881年に最初の養蜂協会が出来て以来、農作物展示会や養蜂家の集まりでハチミツやその他のミツバチ生産物品評会が行われ、技術の向上と養蜂の普及のために、またミツバチが我々の生活の中で果たす重要な働きを知らせる啓蒙活動としても大きな役割を果たしてきた。多様なカテゴリーがあり、詳細は大会公式サイト参照。

- ・養蜂企業の製品（ハチミツ、辛口ミード、甘口ミード、蜂ろう）
- ・養蜂家の自前の生産物（色別ハチミツ各種／明色・中間色・暗色、巣入りハチミツ、結晶ハチミツ、ミード、蜂ろうのディスプレイ。注：最低5kgのハチミツを含むこと）
- ・巣蜜（角形セクション、丸型、巣巣板、容器入り）
- ・ミード（辛口、甘口）
- ・蜂ろうとキャンドル（500g塊、鋳型使用の3本組キャンドル、鋳型不使用の3本組キャンドル）
- ・ハチミツケーキ（プレーンケーキ、フルーツケーキ）

### 大会登録

アピモンディア 2005 参加登録者は会期中に

行われるすべての学術セッション、展示エリア、式典、その他の催しへの入場ができる。参加者タイプごとに登録料は異なる。早期申込み割引は2005年6月1日で締め切り。インターネット経由の登録用ページも開設される。

大会登録料		
登録料	早期申込み (05年6月1日まで)	一般申込み (6月1日以降)
大会参加者	350 EUR	425 EUR
途上国参加者	250 EUR	300 EUR
同伴者	200 EUR	250 EUR
1日券	125 EUR	125 EUR

大会登録料に含まれるもの：開・閉会式、アピエクスポ 2005 会場およびワールドハニーショウを含む国際アピモンディア村、すべての学術セッション、会議資料とバッグ、8月26日の見学旅行、アイリッシュナイト（23日）、会場内の観光案内と参加者サービスデスクの利用

同伴登録料に含まれるもの：開・閉会式、アピエクスポ 2005 会場、ワールドハニーショウを含む国際アピモンディア村、ダブリン市内パノラマ観光、8月26日の見学旅行、アイリッシュナイト（23日）、会場内観光案内とサービスデスクの利用

1日券では当日の学術セッションとアピエクスポ 2005 会場およびワールドハニーショウを含む国際アピモンディア村に入場可。

### ※登録費等の支払い方法

支払いはユーロのみ。登録時に参加費、ホテル代、オプションツアー代金を全額まとめて支払う。オンライン決済はビザとマスターカードのみを受付。上記の支払いが確認されると事務局から大会登録受付のメールが送信される。

### 見学旅行

最終日8月26日に実施される見学旅行は先史時代の遺跡から、ウィスキーの試飲まで多様な魅力をもつアイルランド各地へ向かう全10コースが用意された。ほとんどのコースに養蜂関連見学が組み込まれていて、大会登録者と同伴者のみが参加できる。参加申し込み時に見学旅行ツアー番号も忘れずに指定し、アイルランド各地の養蜂だけでなく、美しい自然と歴史を

お楽しみいただきたい。

- ツアー① 王と城の旅 (9h)
- ツアー② 聖人と学者の旅 (11h)
- ツアー③ 巨人の郷、アントリム (11h)
- ツアー④ 北北西に進路をとれ (11h)
- ツアー⑤ アイルランドの庭園 (9.5h)
- ツアー⑥ 光あふれる南東部へ (9.5h)
- ツアー⑦ オウファリーはオウ素敵 (9.5h)
- ツアー⑧ パワーズコートと国営種馬場 (8h)
- ツアー⑨ ティッペラリーは遠い (11h)
- ツアー⑩ カントリーハウス見学 (9.5h)

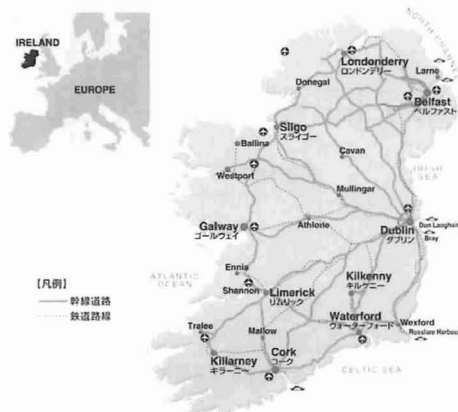
### 宿泊施設

参加者のために多様な施設が用意され、参加登録と同時に申し込める。大会公式サイト参照。

### 開催都市ダブリン

国内には魅力あふれる地域が多数あるが、首都ダブリンは人々を楽しませ、暖かく迎える町として知られている。現代のダブリンは、多くの一流多国籍企業を擁する、ヨーロッパ共同体内の先端的な経済都市としても機能している。ダブリン国際空港は市内から 10 km、空港―市内間は直通バスあるいはタクシーを利用、ほかに市内と主要ホテルを結ぶ直通バスもある。市内と周辺地域のホテル室数は合計 12,000 室、

ダブリンには著名な観光スポットが多数ある。1592 年にエリザベス 1 世が創立したアイルランド最古の大学、トリニティー・カレッジとその所蔵品である、西暦 800 年頃に書かれ、世界で最も壮麗な装飾写本に数えられる「ケルズの書」、5 世紀に、アイルランドの守護聖人聖パトリックがキリスト教への改宗者の洗礼を行ったとされる聖パトリック大聖堂、12 世紀にアイルランドの征服者であったノルマン人騎士リチャード・ド・クレアが建てたクライストチャーチ大聖堂、国宝であるタラ・ブローチをはじめ、紀元前 2000 年から 20 世紀に至るまで広範囲に渡る素晴らしい美術工芸品が展示されているアイルランド国立博物館／考古学・歴史館、1204 年にジョン王によって建てられ、1922 年まで約 700 年間に渡ってイギリス支配



アイルランド政府観光庁

のシンボルであったダブリン城などである。

またジョージ・バーナード・ショー、ウィリアム・バトラー・イェーツ、サミュエル・ベケット、シェーマス・ヒーニーの 4 人のノーベル文学賞受賞作家の他、ジェームス・ジョイス、オスカー・ワイルド、ジョナサン・スウィフトなどアイルランド文学史上有名な文豪の品々を展示するダブリン作家記念館、世界最大のビール醸造所ギネスのストアハウスやウイスキーの元祖アイリッシュ・ウイスキーの歴史を詳しく解説しているジェムソン・ウイスキー蒸溜所とチムニーも多くの人で賑わっている。

\* \* \* \*

Apimondia 2005 はアイルランド養蜂家連盟が北アイルランド（英国）のアルスター養蜂家協会と協力して開催する。英国、スコットランド、ウェールズの各養蜂家協会からも後援。

### 大会事務局：

Apimondia 2005  
c/o Ovation Group  
1 Clarinda Park North,  
Dun Laoghaire, Co Dublin, Ireland  
Tel: +353 1 2802641 / Fax: +353 1 2802665  
e-mail: apimondia2005@ovation.ie  
大会公式サイト: www.apimondia2005.com

日本からの大会参加旅行が企画されるので、ぜひご参加を。なお、大会参加や出展・出品についての詳細は大会公式サイトで。種々の問い合わせはミツバチ科学研究施設でもお受けする。

(翻訳 榎本ひとみ)